『郡上方言』の文法

Grammatical expressions described in "Gujo Dialects"

山　田　敏　弘

YAMADA Toshihiro

キーワード：郡上方言，文法

1．はじめに

昭和27年 岐阜県立郡上高等学校方言研究会編(野田直治教諭指導)による『郡上方言　第1集　語彙編』(以下,『郡上方言』とだけ記す)は，その記述の詳細さと豊富さによって，岐阜県の方言集のみならず，全国で種々編まれている方言集の中でも抜きに出る秀逸さを有している。

文法記述に関しては，巻末に4ページあまりの「郡上方言の語法」と題された小考が付録として記されているが，編者が「語法の研究は今後の課題であって，今回の研究目標ではなかった。従ってここに上げたのも語彙の一部を語法的分類によって整理したまでである(p.189)」と述べているとおり，分量としては大きなものではない。しかしながら待遇法の中に卑下の表現を取り入れるなど先進的な分類を行っており，その記述は現在の水準においても何ら遜色ないほどである。また，用例が語彙に付されて挙げられているが，その用例のよさは，そこに見られる文法事象の豊富さにも現れている。

本考察は，このような『郡上方言』の編者が意図したであろう『同　第2集　文法編』が編まれるとしたらどのようなものになるべきか，半世紀後の日本語研究・方言研究の成果も取り入れながら，その方向性を探るものである。

2．資料の分析方法

『郡上方言』は，149ページの五十音順に並べられた語彙解説と，32ページからなる意味から方言形を引ける索引に類する箇所で本編が形成されている。ほかに付録として「郡上方言の語法」「音韻転訛」「郡上郡におけるいろりの座席名」「郡上郡の概要」を含む。

郡内をくまなく回って集められた語彙には，多く同時に採取された用例が多数つけられており，この用例を分析することで，単なる語彙集としてだけでなく，文法的にも多くのことが見いだせる。

今回は語彙解説に含まれる項目と，そこに挙げられる例文に含まれる文法的要素を主として分析し，「郡上方言の語法」の記述を入れながら，分野ごとにまとめることを主眼に置く。

筆者自らも郡内諸氏にご協力いただき実地調査も行っているが，実地調査が網羅的ではないことに加え，なにより紙幅の都合があることにより,『郡上方言　第2集　文法編』がもし編まれるとしたら，どのような調査が必要となるかという点を指摘するにとどめ，それをふまえた調査結果については別稿を記すこととし，今回の考察には基本的に入れない。

なお,『郡上方言』ではガ行鼻濁音に関して「カ゜」等，半濁点による記述がなされているが，資料をコンピュータで整理する都合上，またワープロで原稿を作成する都合上，本考察では通常の濁点による記述に置き換えてある。片仮名で示した用例中，文節頭以外のガ行音は，オリジナルでは半濁点による記述がされているものとして読んでいただきたい。

また，以下に挙げる用例は共通語訳が『郡上方言』本文中に原則的に示されているが，本考察ではスペースの都合上，省略した。解釈に必要と思われるものについては，当該語句の直後に括弧書きに

て意味を記した。

３．活用

動詞，形容詞，形容動詞の活用形については，終止・連体形はナ形容詞の特定の接続を除き特に示す必要はないほか，否定形を８節，仮定形を17.2節，命令形を15.4節，意向・推量形を14.2節および15.1節にそれぞれ示すため，重複を避け，ここではいわゆる連用形相当のもののみを示す。

動詞の場合，五段動詞のテ形・タ形は基本的に音便の形をとる。特に共通語と異なるのはサ行イ音便が存在することである。

- オレ　オマイニ　ホン　カヤイタカヤ　(p.47)
- ショー　ダイテ　ハタラケヨ　(p.75)

バ行ウ音便等は見られない。

イ形容詞の場合，語幹末母音によってそれぞれ音便の形をとる。

- コリャ　ソー　アクレンナ。チート　オトナショー　シトレヨ。　(p.9)　[語幹末母音=i]
- コンダケ　サブーテワ　カナワン　(p.46)　[語幹末母音=u]
- セッカクノ　マツリニ　マンワルー　ガイキ　ヒーテ　ヨーイカナンダワイナ　(p.137)　[語幹末母音=u]
- ママコーテ　メガ　アイトレン　(p.136)　[語幹末母音=o]
- 竹ヤブガ　ヒドー　イオッテキテ　畑ノ蔭ニナル　(p.15)　[語幹末母音=o]
- ボールガ　速ヨーテ　ウケレナンダ　(p.24)　[語幹末母音=a]
- マー　キッパズケ　アルダケ　クワマイカヨ　ノーナリャ　マタ　ナントカ　ナルネ　(p.51)　[語幹末母音=a]

形容詞型の活用をする願望を表す「タイ」も同様である。

- アイツノ　カオ　ミルト　カッカラカイテ　ヤリトーナル　(p.45)

４．格助詞

格助詞とは狭義には文に含まれる名詞成分と述語との関係を表す音声的に非自立的な小辞である。

郡上方言では，「ガ，ヲ，ニ，エ，ト，デ，カラ，ヨリ，マデ」の９つの格助詞が用いられる。

ガ格は，共通語と同じく，動作や属性の主体を表すほか，一部，状態的な動詞や形容詞の対象としても用いられる。格助詞の用例は多数見られるため，特徴的なもののみを挙げる。

- バスガ　カヨウヨーニ　ナッテカラ　キシャニ　ノルキガ　センナ。(p.9)　[動作主体]
- クビガ　タルーテ　シヤナイ。(p.7)　[属性主体]
- コリガ　欲シー　(p.65)　[対象]

ヲ格は，動作の対象を表すほか，経過域を表す点でも共通語と同様である。

- コノ　ドンブリニ　テンコモリノ　メシヲ　クッテマッタ　(p.101)　[動作対象]
- バスガ　アスコヲ　イキョール　(p.17)　[経過域]

ガ格とヲ格は頻繁に省略される(ϕは省略された格助詞を表す)。

- ウチノ　ババサマϕ　コッチー　コナンダカエ　(p.120)　[ガ格：動作主体]
- オレ　オマイニ　ホンϕ　カヤイタ(=返した)カヤ　(p.47)　[ヲ格：動作対象]

ニ格は，動作対象，感情の対象，対象移動物の受け手，存在場所，着点など，述語とのさまざまな関係を表す。音声的には広母音化して「ネ」と表記されたり，ナ行音の前で撥音化することもある。

- アノ女，チョット　オレニ　イコイトル(=惚れている)ワイ　(p.18)　[動作対象]
- オリャ　テマイネ　ヨワイモンジャデ…　(p.100)　[感情の対象]
- オレ　オマイニ　ホン　カヤイタカヤ　(p.47)　[受け手]

- ソコニ　アルダ　(p.14)［存在場所］
- バスガ　カヨウヨーニ　ナッテカラ　キシャニ　ノルキガ　センナ。(p.9)［着点］
- コリャ　ソー　イソガンデ　アイマ＝コーマニ(=ひまひまに)　ヤッテクリョヨ　(p.7)［時間］
- ソコ　ドケヨ，ジャマンナルニ。(p.104)［結果状態］
- アノ子ハ　オトナシー　子ジャ。オマイモ　アイフーニ　セニヤ[ママ]　アカンゾヨ。(p.7)［指定辞の連用形］

エ格は移動の着点および方向を表す。

- アシタカラ　モー　ガッコエ　イカデモ　エー　(p.16)［主体移動の着点］
- キサマ　ミタイナ　ドダーケワ　アッチエ　イカサレ　(p.17)［移動の方向］

共通語には対応しにくい次のようなエ格も見られる。

- モー　チョットデ　ガケットエ　コケテ　オチルトコ　ジャッタ　(p.60)

上例は「もう少しで崖へふみはずして落ちる所だった」と注釈がつけられているが，「崖へふみはずす」も「崖へ落ちる」も意味が通らず，臨時的な言い間違いの可能性もある。

また，用例としてではないが，次のような記述も見られる。

- メーモ＝ガ＝ハイル　目へ物が入る　(p.140)

共通語では「風呂に入る」「壁に貼る」等，着点に存在し続ける場合，ニ格が好まれ，へ格は使われにくい傾向が見られる(庵，高梨，中西，山田 2000:24など参照)が，郡上方言においてはへ格が相対的には用いられやすい傾向があるとも考えられる。今後，「風呂へ入る」と「風呂に入る」のどちらが言いやすいかなど確認する必要がある。

述語との関係を表すト格については，次のような用例が見られる。

- オマイノ　万年筆ワ　オレノト　ネッカ(=全然)　ツイ(=同じ)　ジャ　(p.96)［比較異同の対象］
- 赤ンボ　チョーラカイタラ(=あやしたら)　ニコットト　笑ッタ　(p.95)［様態］

後者は引用のトに近接する。

「ＸガＹト結婚する」のような動作の相手を表すト格，および「ＸガＹト映画を見に行く」のような動作を共同で行う相手を表すト格については，『郡上方言』中には用例が見られないが当然存在するであろう。

デ格について，用例として含まれているのは次のようなものである。

- トナリデ　三百円　トキガリ　シテ　キテクレンカイ。(p.103)［動作場所］
- 自転車デ　アトヲ　ボクッテ(=追い駆ける)　イッタ　(p.131)［道具］
- コノ　サカナ　ミンナ　買ウガ　メッソデ(=目秤りで)　五百円ニ　シナレヨ　(p.141)［手段］
- 暴風デ　屋根ヲムクラレテ　シマッタ　(p.139)［起因］

カラ格は離れる動作の起点の用法として次のような用法が確認される。

- フトンカラ　ノッテデル　(p.116)［主体移動の起点］
- ソデ(=外)カラ　ハイッテ　キタモンジャデ　ウチンナカガ　マックラデ　ナンニモ　ミエン。(p.85)［主体移動の起点］

このほかに周辺的な成分の範囲の一端を表すカラとして次のような用例が見られる。

- アシタカラ　モー　ガッコエ　イカデモ　エー　(p.16)

ヨリ格については，もっぱら比較の対象として用いられる。

- チクショー　ヨリ　オトリジャ(=劣っている)　(p.36)
- キンノノ　アサヨリ　ケサノ方ガ　ヨケー　サブイナ　(p.149)

共通語ではやや硬い文体でカラ格と同様の意味で用いられるが，郡上方言ではカラ格と置き換えられる用法は見られない。

マデ格については次の用例が見られる。

- ホットネー。エキマデ　イクガ　アグマシーモナ。(p.9)［移動の着点］
- アノ町マデ　行クニワ　ヒイッパイ　カカル　(p.122)［移動の着点］

主観的な意味が込められたマデについては，第13.3節で扱う。

５．連体助詞・準体助詞・並立助詞

現代の日本語文法研究では通常，名詞と名詞をもっぱらに結びつける「ノ」や「ト」「ヤ」などは格助詞の類に含まれない。「ノ」は連体助詞として前の名詞が後ろの名詞を修飾する関係を表し，「ト」「ヤ」は前後の名詞を列挙する働きを持ち並列助詞などと呼ばれる。

連体助詞の「ノ」に関しては次のような用例が見られる。

- オリノ本　(p.39)
- シオリワ　ホンノ　アワサイ(=間)ニ　イレトイタ　(p.14)
- コンダケノ　大工事セルナー　エライ　コッチャナ　(p.29)

「ノ」の表す前後の名詞の意味的関係は多様なものである。このほかの用法を含め，郡上方言の連体助詞は共通語と特に異なる点は見いだされない。

名詞修飾節における格助詞「ガ」の交替形についても同様である。

- アノ子ノ　カエルノガ　マチビシー　(p.136)

「ノ」は，共通語の「赤いのがいい」や「ぼくのは大きい」のように単独の用言や体言を受けて名詞の代用として用いられることもある(準体助詞)が，このような用法は『郡上方言』には見られない。

名詞句を伴う節を受ける準体助詞としては次のような用例が見られる。

- モット　アツラエルノガ　ホットヤケンド　ナンニショー　ゼニガ　ツモイ　モンヤデ　コンダケデ　コラエテ　オクレヨ　(p.10)
- アノ子ノ　カエルノガ　マチビシー　(p.136)
- アノ　オトナシー　ヒトガ　アレダケ　オコルノワ　ヨクセキナ(=よくよくの)コトガ　アルニチガイナイ　(p.149)
- コンダケノ　大工事セルナー　エライ　コッチャナ　(p.29)

上の最後の用例は「ノワ」が融合して「ナー」となったものである。

用例から見ると節を受ける準体助詞は表出されるのが一般的であるが，次のように「ノ」を介さず用言が直接格助詞に続いていく用例も少ないが見られる。

- ホットネー。エキマデ　イクφガ　アグマシーモナ。(p.9)

名詞と名詞を並べて挙げる並列助詞としては，次のような用例が見られる。

- ワシ　ネギト　ニンジン　ダッキライ　(p.91)
- アレト　コレト　ドッチガ　タント　アルヤロカ　(p.149)
- マツリヤ　ナンヤラデ　サッパリ　ドガツイテ　マッテ　イネカリガ　オソー　ナッテシマッタ。(p.103)

いずれも共通語の用法と特に異なる用法は見られない。

６．ヴォイス

格の交替と動詞への接辞付加によって，同一の出来事を異なる立場から表現する手段には，受身，使役などがある。このような手段を総称してヴォイスと呼ぶ。

６.１　受身

『郡上方言』に見られる受身を含む用例は以下の通りである。

- イシナ　コキツケラレタ　(p.59)
- シカレル（叱られる）　(p.71)
- 先生にシカレルぞ　(p.189)
- ンマイコト　アイツニ　タネコマレタワイ　(p.92)
- ソンナラ　オジギナシニ　ヨバレマスワイ　(p.151)
- ナーンテ　イワレテモ　ワシ　ドーモ　ナイモ。(p.103)
- 暴風デ　屋根ヲムクラレテ　シマッタ　(p.139)
- 奉公先カラ　ヒマダサレテ　キタラシー　(p.125)

このうち特徴的なのが「シカレル」である。「シカレル」は五段動詞である能動形「叱る」から生産的に得られる形「叱られる」とは異なる形式を持つ。その成立は定かではないが，「教える」に対する「教わる」，「言いつける」に対する「言いつかる」等，受身の「教えられる」「言いつけられる」と同等の意味を表す短形を持つ語もいくつか存在することから，同様に受け手側からの表現として，孤立的に成立したものと考えられる。なお，郡上方言において同様の活用をする受け手側からの表現は（俚諺としては）記述されていない。

「ヨバレル」については，一応，「呼ぶ」の規則的対応から得られる受身形と捉えておくが，意味は単純な「呼ぶ」ではなく「饗宴等に呼ばれる」すなわち「ご馳走をいただく」という意味に変容している。このため「呼ぶ」との対応ではなく別個の自動詞と考えた方がよいかもしれない。

また，直接受身・間接受身など，受身文の下位分類に関しては，特に判断できるほどの材料は『郡上方言』中には見られないが，「暴風で〜」などは間接受身であろう。

6.2　使役的他動詞「〜カス」

使役に関しては，通常の使役形を作る一段動詞型の「セル・サセル」も五段動詞型の「ス・サス」も『郡上方言』の記述には見られないが，言うまでもなく使役自体は頻用されていると思われる。五段型と一段型のどちらが各活用形において用いられているかなどを調べる必要がある。

『郡上方言』の記述に頻繁に見られるのは「カス」を用いた使役的表現である。

- チョット　アイマチシテ　ドンブリ　ワラカイタワイ　(p.8)
- オリャ　ゴメンシテムラッテ　イズマカスワイ（＝イズマカク）　(p.19)
- イタマカス　(p.19)
- 「クツバカイテ　ヤロカ」「アーン　クツバシーワイ」　(p.54)
- カーチャン　セブラカイテ　ヤット　カッテ　ムラッタンジャ　(p.82)
- チーサイ　コドモー　ナカセンヨーニ　アンバヨー　ダマカイテ　アスベヨ　(p.92)
- ヨド　タラカイトル　(p.93)
- チャラカス　（ざれ戯れる）(p.95)
- 赤ンボ　チョーラカイタラ　ニコット　笑ッタ　(p.95)
- 八時ニ　ナッタラ　ベル　ナラカイトクレ。(p.111)
- ホシモノ　ヒーラカイテ　オクレ　（乾かす）(p.122)
- 米　ヒヤカイテ　オケ　(p.125)
- フケラカス　（見せびらかす）　(p.127)
- コメヲ　フヤカイトク　(p.128)
- ハラ　ヘラカイテ　ヘトヘトニ　ナッテ　カエッテキタ　(p.129)
- ヒネマイワ　ヨー　ホトバカイテカラ　タカニャ　メシガ　コワイゾヨ　(p.132)
- アネムスメヲ　ヨメラカイテカラ　イモトヲ　カタズケニャ…　(p.151)
- ワラカイタ　(p.153)

形態論的には，次のような対応を示す。

[共通語の対応する自動詞に加え，他動詞をももつもの]

ワラカス（割れる・割る），タラカス（垂れる・垂らす），ナラカス（鳴る・鳴らす），ヒヤカス（冷える・冷やす），ヘラカス（減る・減らす），イタマカス（傷む・傷める）

この類は共通語においても，基本となる自動詞に使役にも共通する「す」という接辞が付加されて形成される他動詞が対応するものが多い。「カス」は基本的に使役につながる他に対する働きかけを表す形式と考えられるが，働きかけを受けた対象物が自ら動作や変化を生じないことから考えて，使役とは言い難い。共通語の「す」と対応する形式が最も多くの例が見られることから考えても，他動詞化接辞と考えられる。

[共通語の対応する自動詞をもつもの]

フヤカス（ふやける）

「ふやかす」は共通語の辞書にも記載される形式であり，郡上方言のみで使われる形ではない。ただ，「カス」が取り上げられることが多いが，今回の資料に見あたらないものでこのような「カス-ケル」の対応をもつものもあるであろう。また生産性の面から考えても，「カス-ケル」は有用な手段とも考えられる。

また，「ホトバカス」は郡上方言では自動詞「ホトビル」に対応する。

[共通語の対応する他動詞をもつもの]

セビラカス（せびる），ダマカス（だます）

[共通語の対応する動詞をもたないもの]

クツバカス，チャラカス，チョーラカス，ヒーラカス，フケラカス，ヨメラカス

この類は「他者を何らかの状態にする」という他動詞的な意味をもつ。文法的な使役はそもそも他動詞あるいは自動詞の動作主に対して，第三者が何らかの働きかけを行うことによってその他動詞/自動詞を含む出来事の成立をもたらすものであり，このような対応する動詞を持たない場合，使役とは認定されない。

７．可能・難易

７.１　可能表現

『郡上方言』附録「郡上方言の語法」にもあるように，郡上方言の可能形は基本的に，いわゆるら抜きとれ足すである。すなわち一段動詞「起きる」「出る」などの可能形は「起きれる」「でれる」のように，「ら」を介さず「れる」が後接する一方，五段活用の動詞「行く」「泣く」の可能形は「行けれる」「泣けれる」のような形をとる。

・受ケレル，出レル (p.71)

・行ケレル (p.71)

ただし，五段活用のほうは常にれ足すというわけではないようである。

・ウンサー　イケルカシラン　(p.27)

不可能を表す形式として次の形式が見られる。

・イビガ　カジカンデ　ハシモ　モテン　(p.43)

「ヨー＋動詞の否定形」も散見される。

・誕生日過ギタニ　コノ子　マンダ　ヨー　アヨバン　(p.13)

・カジケテマッテ　ナンニモ　ヨーセン。(p.44)

・ヨー　カセン　(p.44)

最後の例は一見，「貸す」の否定可能形に「ヨー」が前置されたように見えるが，郡上方言の「貸す」は一段動詞の「貸せる」が元の形であり，可能形は「貸せれる」となる。

さらに以下の形式も見られる。

・オマイ　ニゴト　ヒトーリデ　イクカイ。　(p.113)

・コノ　ニシメワ　アマスギテ　クエモナラン　(p.12)

「ニゴト」は本文にもあるとおり「ニンゴト」とも言い「ヨー」と同様の機能を担うものと考えられる。『日本方言大辞典』には「にごと」は「みんごと(見事)」とあり，限定された地域ながら使用が記述されている。

可能形にとりたて助詞が含まれる場合，後半の動詞は共通語では「する」を用いるところであるが，郡上方言では「なる」を用いている。

7.2　難易表現

難易に関する表現として，容易であることを表す表現は『郡上方言』中には見られない。一方，困難を表す表現としては次のような表現が見られる。

・私達農村青年ワ　時間ガ　ナイノデ　勉強ガ　ヤリノクイデス　(p.146)

8．否定

8.1　いわゆる終止形としての否定

郡上方言では一般的に動詞の否定は「ン」で表される。

・コリャ　ソー　イソガンデ　アイマ＝コーマニ　ヤッテクリョヨ　(p.7)［五段］

・アンダ　ドコイッツラエ。マンダ　コンガ。　(p.14)［カ変］

・ソンナ　コト　セルト　ガッテンセンゾ　(p.45)［サ変］

イ形容詞の否定には「ナイ」が用いられる。

・アソコノ　ウチモ　コノゴロ　オモシローナイソーナ　(p.39)

形容詞の否定形については「〜コトナイ」の形も用いられる。

・ワシ　ネッカラ(=少しも)　キズカイナ(=怖い)コト　ナイ　(p.50)

中濃南部およびそれ以西で用いられる「ヘン」による否定は行われないが，次のような形による否定が 2 例見られる。

・ダーレモ　ワラヤセンネ　(p.72)

・ソンネ　タント　オネタッテ　アヨベリャ　セン　(p.87)

このような「〜ヤセン」は共通語の「〜やしない」と同様，強意的な意味をもつものか否か確認する必要がある。

ほかに否定の強さは終助詞によっても表される。

・オラ　シランモ　（中　強い否定）　(p.76)

過去形は基本的に「〜ナンダ」を用いる。

・コトシャ　カキャ　イコ　ナラナンダ　(p.18)

・ボールガ　速ヨーテ　ウケレナンダ　(p.24)

・イカナンダ，セナンダ　(p.112)

『郡上方言』には「〜ンカッタ」形の否定過去は用例が見られない。

なお，否定推量を表す「まい」については，14.2節に述べる。

8.2　反語

否定と関連して反語を表す形式として「スカ」が挙げられている。

・ソンナ　カスナコト　アラスカヨ　(p.44)

・ソンナ　コタ　シラスカヨ。(p.76)

「郡上方言の語法(p.190)」に記述されるように，この「ズ」は意志を表す形式から派生したものであり，否定の「ズ」とは直接的には関係のない語形である。

なお，本考察の範囲からは多少，逸脱するが，昭和33年まで福井県に属していた白鳥町石徹白においては，「スカ」ではなく，「ズカ」の形で老年層において用いられていることも確認されており，このような「ズ」から「ス」への清音化を裏付けることができる。このような「ズカ」形の存在も確認する必要がある。

8.3　否定接続

否定接続については，次のような用例が見られる。

- ナマ　トーカモ　メシ　クワズニ　ネトル　(p.110)
- コー　ヒラゲトラズニ　チート　カタズケタラ　ドージャ　(p.125)
- 運動会ワ　雨サエ　降ラニャ　アルダモ　(p.14)
- 子ドモガ　ジミ(=素直)デナイデ　ハリヤイナイ。(p.73)

形容詞としての「ない」の接続形は，「なく」ではなく，「ナシニ」を用いる。

- カラダジュー　ドッコトナシニ　イタイ　(p.105)

「〜スト」「〜デ」については，「郡上方言の語法」に記述がある。

- シラスト　カエッテ　シマッタ。(p.189)
- ネレデ　ヨワル。(p.189)
- イカデ　ヨカッタ。(p.190)

「スト」については「このスは，否定の助動詞『ず』の清音化したものだろうか(ｐ.190)」とあり，また，「デ」についても「平安朝の否定助詞の名残だろうと思う(p.190)」との記述がある。

9．テンス・アスペクト

9.1　過去

過去は共通語と同様，「タ/ダ」によって表される。

- アシニ　キガ　オチカカッテ　オーアイマチ　サシタゲナ。(p.8)
- キンノーワ　テツダッテ　ムラッテ　オタテカッタノーシ　(p.35)
- 今来タ　ブローカーワ　ズイブン　アザトイ　奴ジャッタナ。(p.9)
- サイサイ　ゴヤッカイ　カケテ　スミマセナンダナ　(p.67)

過去の運用に関しては次のように，現在の状態に対する確認，およびその返答にタ形を用いる用例が見られる。

- 「サンマワ　ヨカッタカナ（＝さんまはいりませんか？)」「今日ワ　マズ　ヨカッタワイナ」(p.149)

過去推量に関しては14.2節で述べる。

9.2　トル・ヨル

アスペクトに関しては，郡上方言では基本的にトルとヨルを区別する。

ヨルは発話者から観察される進行中の出来事を表すのに用いられる。

- バスガ　アスコヲ　イキョール　（イキヨール）　(p.17)
- センセーガ　ムカイヲ　イキョーオイデル　(p.30)

トルは結果の残存状態を表すのが基本である。

- コナイダジュー　ウスナエトッタ　カマガ　コヤーナ　トコニ　アッタガナ　(p.14)
- イガワ(=谷川)ニ　ゴミガ　ツマッテ　ヒドー　イカバットル(=溢れている)　(p.16)

• コノ　ハリガネワ　イガンドル　(p.16)
• アノ女，チョット　オレニ　イコイトル(=惚れている)ワイ　(p.18)
• ソー　イップニ(=専ら)　オカッテニ　バッカ　カカットレン　(p.21)
• ウワツラダケ　カネコリ(=氷)ガ　ハットル　(p.27)
• アカンボガ　オドレトル(=目を覚ましている)ケンド　エーコ　シトル　(p.37)
• オワインナ　コノコ　キモノ　カーシマ(=裏返し)ニ　キトルガナ　(p.41)
• アノ　トラック　荷物ガ　ヒドー　カタゲトル。(p.44)
• イシカケガ　クンドル(=むき出ている）(p.55)
• ヨド(=よだれ)　タラカイトル　(p.93)
• アスコノ　ウチワ　オトコシューガ　ソロットイデルデ　ケナルイ　(p.36)
• コノ子　カワイラシー　顔シトイデルンナ　(p.48)
• 昔ワ　食ウモノガ　ノーテ　一日中　カツエ(=飢え)トッタ　コトモ　アッタ　(p.45)

進行の場合であってもトルが用いられている用例も見られる。

• オリャナ　ゼラ(=出鱈目)　イットルンジャデ　オコットクレンナエ　(p.83)
• コリャ！　ナニ　シトル　ハヨー　コッチー　ウショ　(p.25)
• ナニシタンヨ，ドシテ　ナイトルンヨ。(p.112)
• アンネ　ヒドー　雪ガ　フットル　(p.15)

話し手自身か聞き手の動作を述べる例が多いようである。

また，『郡上方言』ではヨルが命令形で用いられる例は見られず，代わりに，トルが用いられる。

• コリャ　ソー　アクレンナ。チート　オトナショー　シトレヨ。(p.9)

9.3　その他のアスペクト表現

出来事の開始局面に関しては次の用例が見られる。

• 堆肥ガ　イキリダイタ　(p.17)
• コリャ　ヨワッタ。フッテ　キタワイ。(p.151)

次のような語形も観察されるが生産性などを含めて調査が必要である。

• コノ　メシャ　ハヤ　ネグサリ　クサイ。(P.114)

過去における未実現の出来事は「〜トコジャッタ」で表される用例が見られる。

• モー　チョットデ　ガケットエ　コケテ　オチルトコ　ジャッタ　(p.60)

未実現の出来事に「〜ヨッタ」を用いることも可能であろうと思われるが，『郡上方言』中に用例は見られない。

• モー　チョットデ　ガケットエ　コケテ　オチヨッタ

出来事の持続局面に関しては，その頻度および程度の強さを表す次の用法が見られる。

• アイツノ　カオ　ミルト　カッカラカイテ(=掻く)　ヤリトーナル　(p.45)
• 風邪ヒータカ　知ランガ　ハクショガ　出テシヤナイ　(P.118)
• ソー　悲シー　コトモ　ナイノニ　泣キマワッテカラニ　(P.137)

「〜マワル」は意味として「〜したりなんかする（他人の行動をわざと意地張ってするものの如く解して，之を非難する調子にも使う）(p.137)」と記述があり，アスペクト形式というよりも強意の形式であるとも解される。

出来事の終結局面に関しては次のような用例が見られる。

• オマイ　マンダ　ガイキガ　ナオリキランデ　キバッテ　イクト　ダチカンゾヨ　(p.52)
• コノ　ドンブリニ　テンコモリノ　メシヨ　クッテマッタ　(p.101)

他動詞に後接して結果状態の放置を表す形式としては「〜テアル」が挙げられる。「〜テアル」が

「〜タル」となっている用例は見られない。

・オラ　畑モ　田甫モ　ホテカイテ　アルガ　(p.132)

用法は共通語と大きく違わない。

10. 方向性

共通語では話し手を移動を捉える基点として捉え，遠心的方向の移動には「(〜て)いく」，求心的方向の移動には「(〜て)くる」を用いる。

郡上方言で共通語と大きく違う点は，勧誘，疑問等として投げかけられた移動に答える際には，その投げかけた人物を基点として捉えて表現する点である。

・「今夜　オレンドコエ　遊ビニ　コイヨ」「ヨシ　クルワイ」(p.54)

共通語で「行く」をもちいるところで，「クル」を用いている。

補助動詞としては次のような表現が見られる。

・コエ　イナッテ(=担って)　イク　(p.22)

・ヤブヲ　コザイテ(=押し分けて)　イク　(p.61)

・ニモツヲ　カツネテ(=担いで)　イク　(p.45)

・コナイダノ　カゼガ　ウッツクショー(=きれいに)　モッテッテ　マッタンヤデ　(p.26)

・キッパ(=区切りの所)カラ　サクッテ　イケヨ　(p.51)

・アイツガ　コトワッテキタデ　オレモ　ヤット　キダンガ　オサマッタ(=気が安まった)(p.51)

・シモノホーワ　ケーキガ　エーソーナデ　チート　モーケニ　イッテ　コーカ　(p.73)

以上の補助動詞としての用法は共通語と特に変わった点は見られない。

「イコス」は共通語の「寄越す」と同様，求心的方向の対象物移動を表す。

・ハヨー　トッテ　イコショ　(p.18)

11. 授受表現

11.1　本動詞

授受を表す本動詞については，次のような形式が見られる。

・エーモノ　タント　ムラッテ　スミマセンナ。(p.112)

・ソー　セセクッテ　アルクト　モラエル　ヨメモ　モラエンゾ　(p.82)

・オマセル　（上げる，進上する）(p.38)

・シンゼル　進上する。差し上げる（上，卑）(p.77)

「クレル」については郡上地方の方言では50代以上であれば，ほぼ全域で話し手から離れる方向(=遠心的方向)でも用いることが臨地調査でわかっているが，『郡上方言』には，そのような記述は見られない。ただ，次のような求心的な方向性を表さない用法が見られる。

・ドーカ　ワシニモ　ヒトツ　クレテ　オクレヨ　(p.54)

「ヤル」についての記述はない。

このほかに謙譲語として用いられていると思われる「モラウ」については，第19節で述べる。

11.2　補助動詞

本動詞としては記述のない「ヤル」および「アゲル」は，次のように補助動詞として用いられた用例が見られる。

・コレワ　ヨソノ　注文品デスケンド　オ急ギナラ　アンタサンノ方ヘ　マツカエテ　アゲマスガナ　(p.136)

・手紙ワ　アノ人ニ　アツラエテ　ヤリマシタ。　(p.10)
・アンバエー　ヨメサヨ　ミツケテ　ヤットクレヨ　(p.15)
・オレニマカセナレヨ　ンマイコト　カンコー　シテヤルネ　(p.49)

「テヤル」ならびに「テアゲル」は，話し手から聞き手・第三者，あるいは，聞き手から第三者への恩恵的行為を表すために用いられる。

『郡上方言』の中に「テヤル」の非恩恵的な用法は確認されない。

「クレル」は補助動詞として用いられる場合，「テクレル」とはならず，「トクレル」「テオクレル」「テクダレル」の形をとる。

・コーモ　ゴタイシトクレテ　ホットニ　キノドクジャナ　(p.51)
・トマットクレヨ，ナヨ。タマニ　キトクレタンジャネ。(p.111)
・ヨーシトクレタ　(p.149)タイダイ　モッテ　キテオクレタカ　(p.88)
・モシ　ヨッサガ　キテ　クダレリャ　ハタサクリ　シテ　ムラワマイカ　(p.53)

いずれも聞き手，あるいは第三者から話し手の方向(=求心的方向)に向かう動作が，恩恵的であると話し手自身が捉えていることを表す。「クレル」がもつ遠心的方向の動作を補助動詞として用いる用法については記述がない。

「てもらう」は「テムラウ」の形で多く用いられている。

・オリャ　ゴメンシテムラッテ　イズマカスワイ　(p.19)
・キンノーワ　テツダッテ　ムラッテ　オタテカッタノーシ　(p.35)
・コーモ　メンメンニ　シンパイシテ　ムラッテ　スミマセンナ。　(p.77)
・オレー　イッテムラウヨーナ　モンジャ　アラスカナ　(p.112)
・モシ　ヨッサガ　キテ　クダレリャ　ハタサクリ　シテ　ムラワマイカ　(p.53)
・ヤスマシテ　ムラウ　(p.140)

12. 主題

主題が「ワ」で表されるのは共通語と同様である。

・アノ子ワ　オトナシー　子ジャ。オマイモ　アイフーニ　セニヤ　アカンゾヨ。(p.7)
・今来タ　ブローカーワ　ズイブン　アザトイ　奴ジャッタナ。(p.9)
・キョーワ　ソラビガ　アタタイデ　ハクラン　センヨーニ　キヨ　ツケーヨ　(p.10)

同様にワを用いる用例は『郡上方言』中に無数に見られる。共通語と同様，述語との関係によって規定される格に関係なく主題化される。

一方，前舌母音と「ワ」が融合していわゆる拗音化する現象も見られる。

・コリャ　ソー　イソガンデ　アイマ＝コーマニ　ヤッテクリョヨ　(p.7)
・アノノシ　チョッコシ　オリャ　オマエサンニ　タノミガ　アルンジャガノーシ　(p.11)
・アリヨーノ　ハナシジャガ　イマ　チョットモ　ゼニャ　ナインジャデナ　(p.13)
・コトシャ　栗ガ　イカイコト　ナッタ　(p.15)

「コトワ」「ノワ」が「コタ」「ナ」になる例がある。

・ソンナ　コタ　ドッタナイ　(p.106)
・コンナ　ワルサ　シタナ　ボーカ。(p.46)
・コンナケノ　大工事セルナー　エライ　コッチャナ　(p.29)

ただし，「コタ」はコトを表す形式名詞としての意味を保持しており，それ自体が主題マーカーとして用いられている用例が見られるわけではない。

二重に「ワ」が用いられる例も見られる。前者は主題の「ワ」，後者は対比の「ワ」であると解釈される。

・コトシャ　カキャ　イコ　ナラナンダ　(p.18)

そのほかに主題を表すと考えられる形式は「ナラ」が見られるのみである。

・アノ　ミセナラ　タイテー　アルダー　(p.87)

これも共通語の「なら」と用法の点で同じである。

13. とりたて助詞

主として名詞など，文の成分に後接し，その成分に対して話し手の主観的な捉え方を表す助詞をとりたて助詞(国語学でいうところの副助詞の一部)という。

とりたて助詞は音としては共通語と異なることも多いが，用法はさほど違わない。

なお，際立たせを表すコソは次のような用例がみられるが，特に逆接的な意味をもつ(17.4節参照)。

・ハラガ　ヘルデ　クウデ　コサレ　アジワ　チョットモ　セン　(p.61)

13.1　限定

もっとも典型的な限定を表すのは否定と呼応する「シカ〜ナイ」と「ダケ」である。

・マー　サトガ　チートシカ　ナイデ　タシナンデ　ツカエヨ。　(p.90)

・モット　アツラエルノガ　ホットヤケンド　ナンニショー　ゼニガ　ツモイ　モンヤデ　コンダケデ　コラエテ　オクレヨ　(p.10)

・ウワツラダケ　カネコリガ　ハットル　(p.27)

・オ酒ダケワ　充分アリマスデ　ドーカ　ターント　ノンデ下サイ　(p.93)

・残リワ　モー　アンダケカ　(p.14)

・イッセキデ　コレダケシカナイ　(p.20)

同様の事態の反復を表す場合には「バッカ」「バッカリ」「バッカシ」が用いられる。

・ソー　イップニ　オカッテニ　バッカ　カカットレン　(p.21)

・カラダガ　イカイナ　バッカデ　ダイニ　ヤクニタタン　(p.38)

・ジャケラ　イッテ　バッカ　オッテ　チョットモ　ソージ　シナレンモ　(p.74)

・イッツモカモ　モラウ　バッカリデ　オタテーナ　(p.34)

・デコノボー　バッカシデ　ヤクニ　タタン　(p.99)

「オカッテニ　バッカ　カカットレン」は「お勝手(台所仕事)にかかってばかりはいられない」という意味である。

条件節では「サエ」も限定を表す。

・運動会ワ　雨サエ　降ラニャ　アルダモ　(p.14)

13.2　おおよその数量・程度・範囲

おおよその数量を表す表現としては「バカ」と「グライ」が見られる。

・十日バカ　アスンダ　(p.118)

・ココラ　デワ　反当　十ピョー　グライ　トレルジャローナ　(p.109)

「グライ」には「おおよそ〜なら」という仮定的な意味合いが含まれると考えられる。「グライ」と「バカ」との区別は記述がなく，「ココラ　デワ　反当　十ピョー　バカ　トレルジャローナ」とも言えるかなど，用法の違いについての調査が必要である。

「ダケ」は条件節などの従属節で用いられた場合，程度を表す。

・コンダケ　サブーテワ　カナワン　(p.46)

場所については，「ラ」がおおよその範囲であることを表すために用いられている。

・ココラ　デワ　反当　十ピョー　グライ　トレルジャローナ　(p.109)

13.3　他の例の暗示

ある事態に当てはまる可能性が最も少ない要素を取り立てて，それについてもその事態が成立することを述べることによって，その他の事例では当然，当該事態が生じることを表す表現として「サエモ」がある。

- ヒョーモ(日面)デサエモ　カンジル(=寒い)ニ　オンジ(陰地)ワ　ヨッポド　カンジダ(=寒いだろう)　(p.50)

「マデ」はその事態が最も成立しにくい要素を取り上げ，意外さを表す場合に用いられる。

- ケサ　ズイブン　シミルナ。メシマデ　シミタ　(p.73)
- カベノ　ネキマデ　クサガ　ハエトル　(p.115)

13.4　低評価

共通語同様,「ナンカ」を使って低い評価を表す。

- 畑仕事ナンカ　シトモナイ　(p.17)

「ナンテ」についての例は見られない。

13.5　同類

「モ」は共通語の「も」と同様，同列に列挙される要素を表す。

- アノ子ハ　オトナシー　子ジャ。オマイモ　アイフーニ　セニヤ　アカンゾヨ。　(p.7)
- アノ　ババサモ　オゼマゲテ　ヨチヨチ　アルイテ　ゴザッタワイ　(p.34)
- コトシャ　ナンニショー　コメモ　ナカッタ　コトジャデ　マツリワカンタンニ　シトカマイカ　(p.112)

疑問詞を含む次の表現は，その類すべてを表す表現である。

- イッツモカモ　モラウ　バッカリデ　オタテー(=すまない)ナ　(p.34)
- イッツモカモ　ゴヤッカイナコト　モーシマシテ　(p.21)
- イツモカモ　ハヤ　コヤッカイ　カケマシテ　(p.120)
- ナンヤカヤ　ヨー　オハル(=ねだる)　コジャ　(p.38)

14.　出来事の捉え方を表すモダリティ表現

14.1　断定

名詞文およびナ形容詞文において断定は「ジャ」「ジャッタ」,「ヤ」「ヤッタ」等で表される。

- アノ子ハ　オトナシー　子ジャ。　(p.7)
- オマイノ　万年筆ワ　オレノト　ネッカ　ツイ　ジャ　(p.95)
- アキガ　スンダデ　マー　アンキジャ　(p.14)
- ナンジャッテ，ナンヤッテ　(p.112)
- アンナ，ソレモ　ソヤケンドヨ　(p.11)
- アノヒト　オッカシナ　ヒトヤンナ　(p.35)
- 今来タ　ブローカーワ　ズイブン　アザトイ　奴ジャッタナ。　(p.9)
- ヤッパ　ホーヤッタガ　(p.145)

「ナンジャッテ」「ナンヤッテ」の用例説明には，前者が上保筋，すなわち白鳥町など郡北西部に多く，その他は少ないことに加え，老年層で使われる古い形である一方，後者は郡一円で使われる新しい形式であることが記述されている。同様の記述はp.191にも見られ，50年前の中年層以下ではすでに「ヤ」が用いられていたようである。

『郡上方言』での用例は「ヤ」が相対的に少なく,「ジャ」で記述されているものが多い。また,

「ジャ/ヤ」と特定の終助詞との結びつきやすさなども調査していく必要がある。

なお，名詞およびナ形容詞の否定断定は「デナイ」で表される。

・インニャ　ソーデナイ　(p.24)

動詞およびイ形容詞の断定は，いわゆる終止形を用いるのがふつうである。

・アノ町マデ　行クニワ　ヒイッパイ　カカル　(p.122)

・縄ヨリャ　藤ヅルノ　方ガ　ズット　ツオイ　(p.96)

終助詞が付加される場合については16節で述べる。

14.2　推量

推量は，動詞の終止形に，共通語の「だろう」同様，「ジャロー」「ヤロー」をつける方法が，郡一円で行われているとの記述が見られる。

・イッタジャロー　(p.20)

・ココラ　デワ　反当　十ピョー　グライ　トレルジャローナ　(p.109)

・コノコ　ドーモ　ヒズガ　ナイデ　ドッカ　ワルインジャロカ　(p.123)

・コノコ　ドッカ　ワルインジャロカ。グズッテ　シヤナイガ　(p.52)

・コノコ　ドッカ　ワルインジャロカ　シンキホッテ　シヤナイ。　(p.77)

・ソヤーナコタ　ジョー　ジャロカエ　(p.75)

・イッタヤロー　(p.20)

・オッツケ　バスモ　クルヤロー　(p.35)

「ジャロー」は古く，「ヤロー」は新しいとの記述がある(p.20など)。

「(ヤ)ラ」は郡南部，武儀郡に近い小那比地区および西和良での使用の記述が見られる。

・ソーヤラ　(p.84)

・アノ　店ナラ　タイテイ　アルラ　(p.152)

・外ワ　ズイブン　サムカンラ。　(p.152)

イ形容詞の推量は語幹に「カロ」が後接して表される。

・一々枡デ　ハカラデモ　アテガイデ　ヨカロ　(p.10)

・ヒワ　アジャナカロカエ(大丈夫だろうかね)　(p.14)

・エロー　タネコンデ　ゴザルガ　エラカロナ　（タネル＝挨拶する）　(p.92)

このような「ジャロ」「ヤロ」以外の推量形式には終助詞の「カ」が後接した例は見られない。

ほかに「ダ(モ)」によって推量を表す用法も，古い形式として記述されている。

・ソコニ　アルダ　(p.14)

・アノ　ミセナラ　タイテー　アルダー　（古）　(p.87)

・運動会ワ　雨サエ　降ラニャ　アルダモ　(p.14)

・マー　テンキニ　ナルダモ　(p.133)

・ソリャ　アルダモ。　(p.87)

・ヒモ　ダイブン　サズンデ　キタデ　マー　キエルダモナ　(p.68)

・外ワ　ヨッポド　サブカンダナ　(p.69)

・ホーモデサエモ　カンジルニ　オンジワ　ヨッポド　カンジダ　(p.50)

武儀郡に近い小那比地区では「アルラ」「アラン」という形も見られると報告されている。

「～ズ」を用いる推量の形式については，次のような指定辞およびイ形容詞に後接する形が見られるが，動詞に用いられる例は(同形式を意志の表現として用いる場合を除いて)見られない。

・ソージャラズ　(p.84)

・キョーノ　ヤマイキワ　ヨッポド　サブカラズ，ヒガ　テランデ　(p.69)

• オマエモ　エラカラズガ　ドーカ　イチンチ　タノムゾエ　(p.78)
• ソリャ　ヨカラズ　(p.149)
• エラカラズレド(=辛いだろうか)　(p.190)

過去推量については，すでに上に挙げた「〜タジャロ」「〜タヤロ」の形のほか，「ツラ」の用例も数例見られる。小那比地区では「タラ」の形となる。

• 「モー　五時ギシャワ　イッタジャロカ」「モー　イッツラモ」　(p.20)
• モー　イッツラモ　(p.21)
• マー　十ジニ　ナッツラ　(p.21)
• ヨッポド　サブカッツラナ　(p.69)
• イッタラ　(p.20)　[小那比地区]

否定推量は「マイ」によって表される。

• コノ分ナラ　アシタモ　雨ワ　降ラマイモ　(p.134)
• アルコタ　アルダレド　エー　モナ　アラマイ。　(p.87)
• イカナリ　ソヤーナコタ　セマイモ　(p.16)
• マー　ソロソロ　行カニャ　ナラマイ　(p.111)

共通語では「行かまい」のような未然形と「行くまい」のような連体形のいずれにも尽きうるが，『郡上方言』には「すべての動詞の未然形につくところに特色がある(p.190)」との記述がある。

「マイ」は逆接の接続助詞が後接すると，「〜マケレド」となる。

• ユーダチャ　タイガイ　コマケレド　モシ　キタラ　ホシモノ　タノムゾエ。　(p.87)

なお，推量は必ずしも述語に後接する推量の形式を用いるばかりではない。副詞によって事態の非断定的な捉え方を表す用例も見られる(φは形式がないことを表す)。

• 今日ワ　バカニ　ウミルガ　キット　夕立ガ　クルφゾ　(p.26)

14.3　外的根拠に基づく判断

視覚などの認識によって様態を判断する形式は「ソージャ/ソーナ」である。イ形容詞など状態を表す述語についた場合には，そのような状態であるとの話し手の捉え方を示し，動作や変化を動詞につく場合には，未実現の出来事に対する実現可能性の認識を表すものと考えられる。

• アノ　ハナシコーバイデワ　アンマリ　エー　コトモ　ナサソージャ　(p.120)
• イマニモ　オチソー　ジャッタガ　サレド　フリモ　セナンダワイ。　(p.70)
• コノ　マメソーナ　カオヨ　(p.51)

あきらかに視覚による情報からの判断でない場合，伝聞情報からの判断と解釈されることもある。

• アソコノ　ウチモ　コノゴロ　オモシローナイソーナ　(p.39)
• シモノホーワ　ケーキガ　エーソーナデ　チート　モーケニ　イッテ　コーカ　(p.73)

「ソージャ」のほかには次のような形式が様態からの判断を表すことがある(ただし，「ラシー」は伝聞の解釈もある)。

• ドウヤラ　ハライタガ　サズンダ(=おさまった)ト　ミエル。　(p.68)
• ナジミガ　アルラシー　(p.110)
• 奉公先カラ　ヒマダサレテ　キタラシー　(p.125)

伝聞は，「ソージャ」のほかに「ゲナ」でも表される。

• アシニ　キガ　オチカカッテ　オーアイマチ　サシタゲナ。　(p.8)
• ウレシヤ　ネーサン　マメンナンナイタゲナナ　(p.136)
• イキナレルゲナ　(p.57)
• ソーヤ　エナ　(p.28)

「エナ」は，「郡一円　少」で使用される形式で，注に「げなの訛」とある。

ほかに次のような語形が「白鳥　中-老」で使用される形式としてあげられている。

・ソーヤッサイ　(p.85)

解説には「そうだとさ」とあり，伝聞形式と終助詞との融合した形式と考えられるが，詳しい用法は不明である。

共通語の「ようだ」「みたいだ」に相当する表現は，文末で用いられる用例は見られず，いずれも名詞を修飾する形で「ヨーナ」「ヤーナ」および「ミタヨーナ」の形で用いられる。

・ソノ　ヨーナ　ドガスナ　コト　アラスカナ。　(p.103)

・ソンナ　ヤーナ　ハナシモ　アルコタ　アッタガナ　(p.143)

・オ前ミタヨーナ　ズレッコーナ子ワ　ナイゾ　(p.81)

・オマイ　ミタヨーナ　トロクサイ　ヤツニャ　シンショノ　マタジワ　デキンゾヨ　(p.135)

『日本国語大辞典　第二版』によると，共通語の「みたい」自体，近世語の「見たような」から変化したものとの記述がある。「見たような」は20世紀になってからも用例が見られることからも，郡上方言独特なものではなく当時の共通語に過ぎないのであろう。

「ヨーナ」は指示詞と融合して次のような連体詞を作る。この場合，「ヨーナ」ではなく，音としては「ヤーナ」となる。

・キャーナコト　ダチカン　(p.52)

・コギャーナ　コト　シテワ　ダチカン　(p.59)

・男ノ　クセニ　ソヤーナ　トロクサイ　コッチャ　ダチンカン　(p.108)

・アヤーナ　コタ　ダチカン　(p.12)

14.4　可能性判断

外界に存在する証拠に拠らない話し手の判断を表す形式として，共通語の「かもしれない」に相当する「カモシレン」が用いられる。

・ワイシタラ　アメカモシレンナ　(p.153)

・ヒョットセルト　コリャ　アメンナルカモ　シレンナ　(p.125)

名詞相当語句に後接する「ジャモシレン」という形も見られる。

・コレガ　オサメジャモ　シレン　(p.33)

指定辞を含むと形式上考えられる「ジャモシレン」が，動詞などほかの述語にも後接するか調査する必要がある。

確信がある場合の判断としては「ニチガイナイ」が用いられる。

・アノ　オトナシー　ヒトガ　アレダケ　オコルノワ　ヨクセキナコトガ　アルニ　チガイナイ　(p.149)

14.5　当為判断

出来事がそうあるべきか否かに対する話し手の当為判断を表す形式としては「ニャ　ダシカン」や「テワアカン」が見られる。

・シゴト　モット　アンバヨー　セニャ　ダシカン　(p.15)

・オ金ヲ　ソー　ダダクサニ　ツカッテワ　アカン　(p.90)

14.6　ノダ・モノダ・ワケダ

共通語の「のだ」は郡上方言においては基本的に「ンジャ」で表される。

・アホーニ　オーメショ　クヤルケンド，アイカワラズ　ヤセトルンジャデナ　(p.12)

・アリヨーノ　ハナシジャガ　イマ　チョットモ　ゼニャ　ナインジャデナ　(p.13)
・トシャ　ハヤ　十八ジャケンド　マンダ　イッコニ　オボコインジャデナ　(p.38)
・ダーレモ　イクモンガ　ナイデ　シヤナシニ　ワシガ　イクンジャ　(p.73)
・オレモ　ジッサイ　フトコロガ　エラインジャデ　(p.29)
・ヤートモ　ソー　セルンジャナ　(p.143)

いずれも先行文脈を受けて，それに対する説明の態度を表すものと考えられる。

疑問文では「ンカ」になるほか，終助詞「ナ」に続く場合に「ンヨ」の形も見える。

・ミソシル　ブチャケタンカ　(p.127)
・ヒッチャクニ(=知らずに)　フンダンヨナ　ヤコト(=わざと)デ　アラスカナ　(p.124)

「ン」を介さないで指定辞が動詞に直接後接する例も見られる。

・イクジャ，イクンジャ　（行くのだ）　(p.74)
・ソーセリャ　オレモ　ヒトカンコー　セルジャナ　(p.49)

この場合，解釈としては「一思案するぞ」と意志を表すものと考えられる記述が見られる。このような「ジャ」は山田敏弘(2002)で述べたように，聞き手の動作に対して用いられた場合には，促しの表現となるが，このように自らの動作に対して用いられた場合には，単なる意志ではなく，「そうするのが当然だ」というニュアンスが感じられるものと考えられるが，この辺りも調査が必要である。

聞き手に対して話し手の確信していることを確認する際には「ンヤロ」の形が用いられている。

・オマイ　オレノ　アシ　ヤコトニ　フンダンヤロ　(p.124)

「モンジャ」は，話し手の主観的な考えに後接する場合，伝達を表す終助詞と似た働きをもつ。

・ヒイッパイニ　町エ　着キタイ　モンジャ　(p.122)

一方，同じ「モンジャ」でも，客観的な事象についた場合には，当為判断の形式として用いられる。

・世ノ中ワ　マットーニ　ワタルモンジャ　(p.136)
・人ノ顔　ソー　マブットル(=見つめている)モンジャ　ナイゾヨ　(p.136)

「ワケ」を用いた用例については，以下のような「ワケデモナイ」という形を含む用例が 1 例見られたのみである。用法としては共通語との大差はないものと考えられる。

・マッコト　知ランワケデモ　ナイ　(p.136)

15. 話し手の発話態度を表すモダリティ表現

話し手が発話態度として，意志，願望の表現のほか，聞き手に対して働きかける，義務，命令，禁止，依頼，勧誘の表現がある。

15.1　意志

意志は，共通語でも同様であるが，いわゆる終止形でも表される。『郡上方言』では，話し手の意志表現自体が用例としてあまり出てこないが，終止形で意志を表す下の 2 例はいずれも終助詞「ワイ」を伴う。

・コッチガ　チョット　オーイデ　ヘツッテ　ソッチエ　マワスワイ　(p.129)
・ソンナラ　オジギナシニ　ヨバレマスワイ　(p.151)

次の指定辞を伴う例は，14.6節でも述べたが，「そうするのが当然だ」というニュアンスを含んだ意志表現である。

・ソーセリャ　オレモ　ヒトカンコー　セルジャナ　(p.49)

いわゆる意向形については，本編のほか，「郡上方言の語法」にも記述が見られる。

・ソンナラ　オジギナシニ　イタダコーカナ　(p.33)
・ノショーカエ　（載せウ…載せよう）(p.190)

・ショーカナ　（せウ…しよう）(p.190)
・コー　（来ウ…こよう）(p.190)

「ズ」で意志を表すと思われる用法は，次の１例見られる。

・ドレ　オレモ　ソロソロ　デカケズヨ　（出かけようよ）(p.78)

15.2　願望

願望は「タイ」で表されると考えられるが，『郡上方言』には「タイ」単独で願望を表す例は見られず，次のような「タイ　モンジャ」という形で１例見られるのみである。

・ヒイッパイニ　町エ　着キタイ　モンジャ　(p.122)

ほかに「タイ」を含む形式としては次のようなものが見られる。

・アイツノ　カオ　ミルト　カッカラカイテ　ヤリトーナル　(p.45)
・ユーベ　イリボリ　シタラ　キョーワ　ネブトーテ　カナワン　(p.23)

「たい」の否定形「たくない」ととりたて助詞「も」からなる形「トモナイ」は，共通語の「したくもない」などのように，強い否定的な意志を表すのではなく，当該動作に対する気が進まないという態度を表す。

・畑仕事ナンカ　シトモナイ（する気になれない）　(p.17)
・コンナ本ワ　ヨミトモナイ（読む気がしない）　(p.17)

気が進まないことを表す形式としては，次のような形式も見られる。

・バスガ　カヨウヨーニ　ナッテカラ　キシャニ　ノルキガ　センナ。　(p.9)

15.3　義務・不必要

出来事がそうあるべきか否か，話し手のこのような当為判断を表す形式は，その出来事を聞き手などが意志的に引き起こすことが可能な場合には，義務の形式として用いられる。

郡上方言においては，「ニャ　アカン」が用いられる。

・アノ子ハ　オトナシー　子ジャ。オマイモ　アイフーニ　セニヤ[ママ]　アカンゾヨ。(p.7)
・オ前ワ　胃腸ガ　弱イデ，ドクダテ　セニャ　アカンゾ。(p.104)

逆に不必要であることを表す形式としては，いわゆる未然形に「デモ　エー」をつけて表される。

・アシタカラ　モー　ガッコエ　イカデモ　エー　(p.16)
・イカデモ　エー　(p.28)

不必要を表す形式としては「には及ばない」に相当する「ニヨバン」，およびその音声的縮約形である「ネバン」も用いられる。

・イクネバン，イクニバン，イクニヨバン　(p.18)
・クツワ　マンダ　ハケルデ　カウニヨバン　(p.18)
・バスガ　トオルヨーニ　ナッタデ　モー　アルイテ　イクネバン　(p.18)

逆接的な終助詞を含んで「いいと言うのに」「する必要はないというのに」という意味で用いられる次のような形式も見られるが，詳細は不明である。

・ソヤーナ　コタ　セデモ　エートコトヨ　(p.28)

15.4　命令

話し手が，動作を起こせる聞き手に対し，その動作起動を促す表現に，命令，禁止，依頼がある。命令・禁止と依頼は，その強制力の強さの違いによって区別されるが，その差は連続的であり，明確にどこまでを命令，どこからが依頼と線が引けるものではない。ここでは，おおよそ，受益を表す表現「テクレル」を含まないものを命令と捉えて述べておく。

いわゆる命令形を用いるものとしては次のような用例が見られる。

- ショー　ダイテ　ハタラケヨ　(p.75)
- ソコ　ドケヨ，ジャマンナルニ。　(p.104)
- ハヨー　トッテ　イコショ　(p.18)
- チョット　ソレ　カショ　(p.44)
- オ佛飯ジャデ　イナダイテ　食エヨ　(p.22)
- キョーワ　ソラビガ　アタタイデ　ハクラン　センヨーニ　キヲ　ツケーヨ　(p.10)
- オ前ガ　悪インジャデ　コトワッテ　コイ。　(p.63)
- ヒヲ　キヤサン　ヨーニ　セーヨ　(p.52)
- コリャ　ソー　アクレンナ。チート　オトナショー　シトレヨ。　(p.9)

命令形は終助詞「ヨ」と共に用いられることが多い。サ行五段動詞の命令形は，「セ」と「ヨ」が縮約して「ショ」となる。

当時の北濃村二日町(現在の白鳥町地内)の民謡として，次のような命令形も見られる。

- 酒ワ飲マンセ　酒代ワシヨ。　(p.138)

尊敬語に由来すると考えられる形式「ナレ」を含む命令表現も見られる。

- マー　エーカゲンニ　オキナレ(=止めなさい)ヨ　エライネ　(p.31)
- ソノ　ハシゴダン　キューナデ　カンガエテ　ノボンナレ　(p.49)
- オレニマカセナレヨ　ンマイコト　カンコー　シテヤルネ　(p.49)
- チョット　コノ花　カザカイデ　ミナレ。　(p.43)

逆に，目下に対するきつい命令表現としては次のようなものが見られる。

- キサマ　ミタイナ　ドダーケワ　アッチエ　イキサレ　(p.17)
- イキサガレ　(p.17)

15.5　禁止

禁止は否定の命令である。

禁止は共通語同様，終止形に「ナ」をつけてあらわすが，終止形が「る」で終わる場合には撥音便化して「ンナ」となる。

- オーチャクナイ　コト　ユーナ　(p.30)
- コリャ　ソー　アクレンナ。チート　オトナショー　シトレヨ。　(p.9)
- 瓶ワ　高イデ　ダダクサニ　センナヨ　(p.90)

尊敬語形式「ナレル」を含む次のような形も見られる。

- ソンナ　ヤラシー　コト　イーナレンナ　(p.146)

「テワ　アカン」という形で禁止をする場合もある。

- オ金ヲ　ソー　ダダクサニ　ツカッテワ　アカン　(p.90)

15.6　依頼

依頼は「くれる」を補助動詞として用いる方法が一般的である。「くれる」自体，物の受領を受け取る側にとって恩恵的であると捉えた表現であり，その命令は依頼とオーバーラップする。

- ボクニモ　ミカン　ヒトーツ　オクレー　(p.32)
- オレニモ　クリョ　(p.55)
- オンネモ　クロ　(p.55)

「クリョ」は当時の郡一円に多く使用される古い語形であったこと，また「クロ」は新しい語形であったことが記述されている。

補助動詞として「くれる」系の形式を用いる依頼表現は，「テオクレ」「テクリョ」，一部が縮約した「トクレ」のほか，異分析によって生じたであろう「トクリョ」(単独での「オクリョ」という形は見あたらない)が見られる。

- トマッテ　オクレヨ　ンナ　ヤットメジャネ　(p.32)
- モット　アツラエルノガ　ホットヤケンド　ナンニショー　ゼニガ　ツモイ　モンヤデ　コンダケデ　コラエテ　オクレヨ　(p.10)
- モー　ウミタデ(=米が蒸せたから)　ツイテオクレエ　(p.26)
- ドーカ　ワシニモ　ヒトツ　クレテ　オクレヨ　(p.54)
- 八時ニ　ナッタラ　ベル　ナラカイトクレ。　(p.111)
- マツリニャ　ゼッピ　アスビニ　キトクレ。　(p.82)
- アシタ　ドーデモ　キトクレヨ　(p.102)
- シンビョーニ　アガットクレ　(p.78)
- アンバエー　ヨメサヲ　ミツケテ　ヤットクレヨ　(p.15)
- コリャ　ソー　イソガンデ　アイマ＝コーマニ　ヤッテクリョヨ　(p.7)
- オマイ　セーッパイ　キモイッテナ　フルマッテ　クリョヨ　(p.52)
- モチヲ　カヤイトクリョ　コゲルト　ワルイデ　(p.47)

以上はいずれも補助動詞の命令形によって依頼をしているが，疑問の形によって依頼を表す場合もある。

- ボー　エー子ジャネ　ツカイニイッテクレンカイ　(p.30)
- トナリデ　三百円　トキガリ　シテ　キテクレンカイ。　(p.103)

共通語では通常，疑問形を使う方が命令形による依頼よりも丁寧であるが，上の第１例は子どもに対して用いられており，必ずしも待遇的な配慮を伴ってはいないようである。

郡北部および旧西和良地区で用いられた特別な古い語形として次のような記述も見られる。

- カシアレ　貸してくれ　（下）　(p.44)

否定事態の依頼は次のような形が見られる。

- オリャナ　ゼラ　イットルンジャデ　オコットクレンナエ　(p.83)

「くれる」系の依頼のほかには，次のような表現が見られる。

- アッポ　アブアブシテ(=餅を焼いて頂戴)　(p.11)

「もらう」を補助動詞として用いた「テモラエル」については，用例が見られない。

15.7　勧誘

話し手の発意によって，聞き手のみに動作を引き起こさせようとするのが命令・依頼であるのに対し，聞き手と一緒になって話し手も動作をおこなうことを聞き手に対して促す表現が勧誘である。

郡上方言では典型的に「〜aマイカ」の形が用いられる。用例が多いため一部のみ挙げる。

- モー　オコマイカナ　(p.45)
- ヒトキッパニ　カタズケテ　シマワマイカ　(p.51)
- タメラワマイカナ　（=お互いに体に気をつけましょうね）　(p.92)
- マーハヤ　シゴト　オイテ　メシ　クワマイカヨ　(p.134)
- イッショニ　イカマイカ，ゼッピ　イカマイカヨ　(p.134)
- イッショニ　マイラマイカナ　(p.134)
- ソー　ウンジャミ　シトラズネ　ミンナガ　オモウコタ　ハッキリ　イワマイカヨ　(p.27)
- コトシャ　ナンニショー　コメモ　ナカッタ　コトジャデ　マツリワカンタンニシトカマイカ　(p.112)

以上はすべて五段動詞（五段動詞型の補助動詞を含む）の用例であり，一段動詞，カ変動詞の勧誘の形は見られない。

サ変動詞については，「郡上方言の語法」に「セマイカ」の形が記述されている。

その他の勧誘の形式として次のようなものが見られる。

- ツギシデモ　ショーカ　(p.97)
- ヒルメシ　クオーカエ　(p.42)

16. 終助詞

終助詞は，ひとつの形式が，様々なイントネーションがかぶさることによって，様々な意味・機能をもつ。終助詞の分析は様々な方法があるが，ここでは，話し手が持っている情報量と聞き手が持っていると話し手が考えている情報量との比較から，発信系，確認系，疑問系に分けて考察する。

なお，終助詞の用例は非常に多くあるため，紙幅の都合から同様な用例がある場合には省き，特にすべてを挙げると記した場合を除いて，特徴のある用例のみを示す。

16.1　発信系終助詞

終助詞の中でも，共通語の「ぞ，よ，さ，わ」のように，基本的には聞き手の有無に関わらず，話し手が持っている情報を発信する際に用いられる終助詞をここでは発信系終助詞と呼ぶ。

『郡上方言』に記述されている発信系終助詞には，「ゾ，ヨ，エ，ワイ，ガ，デ，モ」などがある。

「ゾ」は話し手の判断を聞き手に伝達する場合に用いる。具体的には述べ立ての文につくのが基本となるが，当為判断，および当為判断を用いた働きかけ表現などにもつく。

「ゾヨ」「ゾエ」「ゾナ」などの複合した形も見られる。

- オ前ワ　胃腸ガ　弱イデ，ドクダテ(=食養生)　セニャ　アカンゾ。　(p.104)
- ソンナ　コト　セルト　ガッテンセンゾ　(p.45)
- 今日ワ　バカニ　ウミルガ　キット　夕立ガ　クルゾ　(p.26)
- ソー　ネキー(=そば)　ヨルト　アブナイゾ　(p.115)
- ワリャ　ヨッポド　オタンチンジャゾヨ　(p.35)
- ソー　グズルト　モー　ツレテ　コンゾヨ　(p.52)
- オマイ　マンダ　ガイキガ　ナオリキランデ　キバッテ　イクト　ダチカンゾヨ　(p.52)
- ヒネマイワ　ヨー　ホトバカイテカラ　タカニャ　メシガ　コワイゾヨ　(p.132)
- オマエモ　エラカラズガ　ドーカ　イチンチ　タノムゾエ　(p.78)
- ソー　アワテタッテ　トッソクニャ　デキンゾエ　(p.105)
- アンマリ　ユーニ　シトルト　キシャニ　ノレンゾナ　(p.147)

「ヨ」は単独で用いられる場合，命令や依頼といった働きかけの表現につく。

- コリャ　ソー　アクレンナ。チート　オトナショー　シトレヨ。　(p.9)
- ショー　ダイテ　ハタラケヨ　(p.75)
- キョーワ　ソラビガ　アタタイデ　ハクラン　センヨーニ　キヲ　ツケーヨ　(p.10)
- アシタ　ドーデモ　キトクレヨ　(p.102)
- コリャ　ソー　イソガンデ　アイマ＝コーマニ　ヤッテクリョヨ　(p.7)

「気をつける」は一段動詞であるから，命令形語尾の「ヨ」とも考えられるが，おそらくその前の長音が命令形語尾の機能を担っており，「ヨ」は終助詞と考えられる。

働きかけの表現以外につく「ヨ」は，聞き手への伝達意図が減じられ詠嘆の表現へとずれこむ。

- コノ　マメソーナ　カオヨ　(p.51)

次のような接続助詞と複合した形式も見られる。

・ソヤーナ　コタ　セデモ　エートコトヨ　　（というのに）　(p.28)

「ヨ」に近いのが「エ」である。

・オリャナ　ゼラ　イットルンジャデ　オコットクレンナエ　(p.83)

聞き手の存在意識がより薄れた表現として「ワイ」という終助詞が挙げられる。上３例が出来事を述べ立てる文に，次の２例が意志を表す文についている。いずれも聞き手意識は強くない。最後の１例は述べたての文を援用し，聞き手に対する伝達を表したものである。

・アノ女，チョット　オレニ　イコイトルワイ　(p.18)

・チョット　アイマチシテ　ドンブリ　ワラカイタワイ　(p.8)

・コリャ　ウレシヤ　アメモ　アホーニ　フランワイ　(p.12)

・オリャ　ゴメンシテムラッテ　イズマカスワイ　(p.19)

・コッチガ　チョット　オーイデ　ヘツッテ　ソッチエ　マワスワイ　(p.129)

・ソー　シゴトガ　イヤナラ　マー　エーワイ　(p.28)

「ワイ」は「ワイサ」「ワイナ」という形式でも用いられる。

・オレモ　コタエラレンワイサ　(p.62)

・ドコ　イッテモ　ソー　トッタカミタカニャ　モーカランワイサ　(p.106)

・キョーワ　マズ　エーワイナ　　（エーワイよりも丁寧）　(p.28)

「ガ」をこの種の終助詞として用いる例も少数ながら見られる。見られる用例をすべて挙げる。

・ヤハーイ　アノコ　キモノ　ウラシマニ　キトルガ　(p.26)

・オラ　畑モ　田甫モ　ホテカイテ　アルガ　(p.132)

・ヤッパ　ホーヤッタガ　(p.145)

順に，「よ」「φ」「ね」という意味解釈が与えられている。発信系の終助詞であろう。

「デ」が伝達系の終助詞として用いられることもある。この場合，「デー」と長音化することも多い。

・オーリョ　アンタ　アメガ　ヒドー　フッテ　キタデー　（よ）　(p.39)

・ワシ　シランデー　（強調の終助詞）　(p.99)

・ソー　デスデー　（そうなんですよ）　(p.99)

・ウソデ　ナイデ。ジョー(=本当)　ヤデ。　(p.75)

・コナイダノ　カゼガ　ウッツクショー　モッテッテ　マッタンヤデ　(p.26)

・「オマン　ホットネ　シヤワセジャデ」「ドシテ」　(p.112)

・トシャ　ハヤ　十八ジャケンド　マンダ　イッコニ　オボコインジャデナ　（ですよ）　(p.38)

山田敏弘(2002:5)において，郡上郡明宝村資料についての分析をおこない，文末で用いられる「デ」について，「アクセントから考えて関西方言のような終助詞の「デ」とは異なるものと捉えられ」結果，終助詞ではなく接続助詞である旨，述べたが，明宝資料の文末に置かれた「デ」の中には，このような終助詞が含まれている可能性も捨てきれない。前稿の論旨全体に大きく関わることではないが，あらためて考察したい。

推量の形式など，判断を表す文につく終助詞として「モ」がある。「モ」は用例の訳として「よ，わ」など発信系の終助詞が当てられており，発信系の終助詞と考えられる。特に分布など詳細の情報については，得られていない。

・運動会ワ　雨サエ　降ラニャ　アルダモ　(p.14)

・コノ分ナラ　アシタモ　雨ワ　降ラマイモ　(p.134)

・オラ　シランモ　（知らないよ）　(p.39)

・イックラ　キバッテモ　チョットモ　デンモ　(p.51)

・セボーテ(=狭くて)　デレンモ。　(p.101)

• ナーンテ　イワレテモ　ワシ　ドーモ　ナイモ。　(p.103)

• ナンテ　イワレテモ　ワシ　ネッカ　エーモ。　(p.114)

特に聞き手に対する伝達を意図しないことが明確な場合，一般に感動などの表現で括られる表出に「ヤ」が用いられることもある。

• コリャ　ウレシヤ　アメモ　アホーニ　フランワイ　(p.12)

より一般的な事象としての捉え方を入れ「〜ことだ」の形式で感情表出をおこなうこともある。

• アリャ！　ウイコッチャ　(p.24)

• ホンネ　ホンネ　イトシーコトジャ　(p.133)

• インニャ　マー　ウイコトヤ　(p.24)

詠嘆的な「ものだ」に近い形式と考えられるのが，次の「モナ」である。用例の訳としては「わね」が当てられている。

• ホットネー。エキマデ　イクガ　アグマシー(=おっくうだ)モナ。　(p.9)

なお，郡上方言においては長良川のより下流域で見られるような，終助詞に「ニ」を用いる現象は次の１例を除いて見られない。

• アンジャナイ(=案じることはない)ネ，ヨー　イケトイタデ　(p.14)

16.2　確認系終助詞

話し手が十分に情報を持っておらず，情報内容を聞き手に確認するために用いる代表的な終助詞として，共通語では「ね」がある。「ね」は郡上方言において「ナ」となる。

• ソージャナ　(p.109)

• エラカロナ　(p.29)

• 今来タ　ブローカーワ　ズイブン　アザトイ　奴ジャッタナ。　(p.9)

• アホーニ　オーメショ　クヤルケンド，アイカワラズ　ヤセトルンジャデナ　(p.12)

• コンダケノ　大工事セルナー　エライ　コッチャナ　(p.29)

• オレー　イッテムラウヨーナ　モンジャ　アラスカナ　(p.112)

• ウレシヤ　ネーサン　マメンナンナイタゲナナ　(p.136)

共通語の「ね」は「おつりは100円ですね」のように，話し手が明らかに情報的に優位な場合，発信系終助詞としても用いられるが，郡上方言の「ナ」も同様である。

• ネツガ　アルカナ。ソーリャ　アカンナ。　(p.9)

• バスガ　カヨウヨーニ　ナッテカラ　キシャニ　ノルキガ　センナ。　(p.9)

明らかな疑問に後接して用いられる場合には，「疑問に丁寧の異を添える場合等に用いる終助詞(p.109)」となる。

• マメナカナ　（疑問）　(p.109)

• ドコイクナ　(p.104)

• ドコイキナレル（ナ）　(p.104)

共通語では「元気ですね」とすれば，疑問ではなく確認要求となり，「ね」には「ナ」のような用法はない。

音声的に前の文から切り離されて「いいか」と念を押す表現に「ナヨ」がある。

• モット　ジミナ　シゴト　セニャ　ダチカンゾヨ。ナヨ。　(p.111)

指定辞の「ヤ」に後接する形で「ヤンナ」の形になった場合，「ね」よりもむしろ「よね」に近く話し手の意見がやや不確かであると話し手自身が認めている場合に使われると考えられる。

• フットニ　ソーヤンナ　(p.127)

• アノヒト　オッカシナ　ヒトヤンナ　(p.35)

「ノー」「ノシ」「ノーシ」にも同様の確認要求機能がある。

- ヤットメジャッタノシ　(p.116)
- キンノーワ　テツダッテ　ムラッテ　オタテカッタノーシ　(p.35)
- サッパリ　オレモ　オジガ　マガッテ　マッテノー　(p.34)
- ソージャノー　(p.116)

確認系の終助詞は，話し手にとって不十分な情報伝達でない場合，聞き手に確認しているという機能をもつ形式であること利用して，聞き手を会話に引き入れるために用いられる間投助詞的な働きにずれこむ。このような間投助詞としては，「ナ」のほか，「ノー」系の「ノ(ー)シ」が用いられる。

- アンナ，ソレモ　ソヤケンドヨ　(p.11)
- アノノーシ　(p.11)
- アノノシ　チョッコシ　オリャ　オマエサンニ　タノミガ　アルンジャガノーシ　(p.11)

共通語でもすでに「じゃん」として終助詞化したと考えられる「(の)ではないか↓」類として，郡上方言では「ガナ」が用いられる。

- シヤナイガナ　オマイ，デキンノヤデ。　(p.73)
- コナイダジュー　ウスナエトッタ　カマガ　コヤーナ　トコニ　アッタガナ　(p.14)

16.3　疑問系終助詞

話し手にとって情報が非常に不足しており，その不足を聞き手によって埋めることを要求する終助詞として，疑問の終助詞がある。

真偽疑問の終助詞は「カ」であり，「イ」「エ」「ナ」という伝達系の終助詞が後続して，「カイ(シ)」「カエ」「カナ」の用例が見られる。

- イタイコト　ナカッタカイ　(p.103)
- ハヤ　アゼヌリ　スマイタカエ。　(p.10)
- ソー　ウンジャミ　シトラズネ　ミンナガ　オモウコタ　ハッキリ　イワマイカヨ　(p.27)
- ネツガ　アルカナ。ソーリャ　アカンナ。　(p.9)
- ソーカイシ　(p.84)
- ソーカイナ　(p.84)

疑問詞疑問文の場合，「カ」ではなく，「エ」「ヨ」「ヤ」が用いられる。

- ナニ　シトルンジャロエ　ハヨー　コバサリャ　エーネ　（だろうな）　(p.64)
- ドコイクエ　(p.104)
- ドコイクンヨ　(p.104)
- ナニシタンヨ，ドシテ　ナイトルンヨ。　(p.112)
- オレノ　フルシキ　ドコニ　アッタヤ。(p.143)
- コレ　ナンデスヤ　(p.143)

最後の一例には「これは何でしたっけ」との訳が与えられている。単に情報不足を補うための疑問ではなく，知っていた情報を忘れたためにおこなう質問と捉えるべきものか詳細を調べる必要がある。

「カシラ(ン)」は「だろうか」同様，自問を表す。

- ウンサー　イケルカシラン　(p.27)

話し手が十分な情報を持っているにも関わらず，疑問系終助詞が用いられる場合，反語の意味をもつ。反語は主に「スカ」で表される。

- ソノ　ヨーナ　ドガスナ　コト　アラスカナ。　(p.103)

17. 複文

述語を含む節が，文中の他の節を連用的に修飾する構造を含む文を(狭義の)複文という。複文は連用修飾的にかかっていく節である従属節，かかられる節である主節とからなるが，従属節の主節に対する意味的関係は，主たるものとして，時間・状況，条件，原因・理由，逆接がある。

形式としては次に挙げるもののほか，「〜テ」があるが，共通語との違いを見いだせないため，ここでは省略する。

17.1　時間・状況

時間を表す接続表現のうち，一般的な「トキ」以外の表現を以下に挙げる。

- ヤット　ミンウチニ　イカイン　ナッタナ　(p.16)
- コッチヘ　クルタンビニ　ヨットクレル　(p.93)
- ワシヲ　ミルナリ　ノッケニ　オコラシタ　ケンド…　(p.116)
- ヤワイ(=準備)ノ　デキ　シカイ　ハジメマス　(p.71)
- コノ手紙ガ　ツキ　シカイニ　来テ　下サイ　(p.71)

「次第」を表す「シカイ」は「シカイニ」という形でも用いられる。　「シナ」は「〜しながら」という付帯状況を表す用法と，「〜間際に」という直前を表す用法とがある。後者は「シナニ」という形式をとる。

- クーシナ　ハナス　(p.72)
- ネシナニ　タベタ　(p.72)

17.2　条件

もっとも典型的な条件は「(リ)ャ」で表される。

- 縄ヨリャ　藤ヅルノ　方ガ　ズット　ツオイ　(p.96)
- 米ワ　一晩　水ニ　漬ケテオキャ　ヨー　ホトビルデナ　(p.132)
- ナニカト　イヤ　スング　ガナラッセル　(p.46)
- モシ　ヨッサガ　キテ　クダレリャ　ハタサクリ　シテ　ムラワマイカ　(p.53)

否定の場合，次のようになる。

- ゼニガ　ナケリャ　ナイデ　ナントカ　ヤッテイケルデ。オワタイナモンジャ　(p.40)
- コレデ　ダチカニャ　マー　ヨシ　ジャ。　(p.90)

「(リ)ャ」は共通語の「ば」におおよそ対応するものと思われるが，実際に共通語では「たら」のほうが適切に思える例もある。

- マー　キッパズケ　アルダケ　クワマイカヨ　ノーナリャ　マタ　ナントカ　ナルネ　(p.51)
- ワイセリャ（＝もしかしたら）　オレモ　イクワイ　(p.153)

共通語では純粋な条件を表す「ば」を用いて「なくなればまたなんとかなる」とは言いにくく，「なくなったらまたなんとかなる」と言った方が自然に聞こえる。

「ト」「タラ」「ナラ」「テワ」の例も見られるが，用例は少ない。

- モチヲ　カヤイトクリョ　コゲルト　ワルイデ　(p.47)
- ソー　ネキー　ヨルト　アブナイゾ　(p.115)
- オマイ　マンダ　ガイキガ　ナオリキランデ　キバッテ　イクト　ダチカンゾヨ　(p.52)
- 赤ンボ　チョーラカイタラ　ニコット　笑ッタ　(p.95)
- ワイシタラ　アメカモシレナンナ　(p.153)
- ネダンガ　ツイナラ　ソリャ　コチノ　ホーガ　エー　(p.95)
- コレワ　ヨソノ　注文品デスケンド　オ急ギナラ　アンタサンノ方ヘ　マツカエテ　アゲマス

ガナ　(p.136)

・コンダケ　サブーテワ　カナワン　(p.46)

補助動詞「てみる」の命令形は共通語でも条件を表すが，郡上方言にも同様の例が見られる。

・コノ　ハシラ　イスッテミヨ，イノクネ　(p.22)

17.3　原因・理由

もっとも典型的な原因・理由表現は「デ」である。用例は無数に見られるが，ここでは主節がある用法２例と主節が省略された用法を１例のみ挙げる。

・キョーワ　ソラビガ　アタタイデ　ハクラン　センヨーニ　キヲ　ツケーヨ　(p.10)

・ナガイ　ビョーニン　ジャデ　カイホーモ　タイテデナイ。　(p.88)

・タマニ　ツクバルト　アシガ　シビレテ　シヤナイデ　(p.19)

「デ」の前は終止形であるが，次のような「ナデ」の形が用いられることがある。

・オマイタ　ホットネ　シャワセジャゾナ　コドモシューガ　リコーナデ　(p.38)

・ソノ　ハシゴダン　キューナデ　カンガエテ　ノボンナレ　(p.49)

・シモノホーワ　ケーキガ　エーソーナデ　チート　モーケニ　イッテ　コーカ　(p.73)

ほかに「モンヤデ」「モンジャデ」「ジャデ」「ンジャデ」「コトジャデ」「ノデ」「テ」などが原因・理由表現として用いられている。

・モット　アツラエルノガ　ホットヤケンド　ナンニショー　ゼニガ　ツモイ　モンヤデ　コンダケデ　コラエテ　オクレヨ　(p.10)

・乳ガ　止マッタモンジャデ　アカンボガ　サッパシ　オブシ　オトイテマッタ　(p.38)

・ダーレニモ　ユー　ヒトガ　ナイジャデ，チョット　センセーニクズッテ　ミタンジャ　(p.52)

・オリャナ　ゼラ　イットルンジャデ　オコットクレンナエ　(p.83)

・コトシャ　ナンニショー　コメモ　ナカッタ　コトジャデ　マツリワカンタンニシトカマイカ　(p.112)

・私達農村青年ワ　時間ガ　ナイノデ　勉強ガ　ヤリノクイデス　(p.146)

・セボーテ　デレンモ。　(p.101)

・セッカクノ　マツリニ　マンワルー　ガイキ　ヒーテ　ヨーイカナンダワイナ　(p.137)

「タラ」も確定事象に対して用いられ，原因・理由を表すことがある。

・エンド　食イスギタラ　ムセドーテ　シヤナイ　(p.140)

主節に命令などの働きかけ表現が来る場合には，原因・理由が「ネ」で表されることもある。

・オレニマカセナレヨ　ンマイコト　カンコー　シテヤルネ　(p.49)

・マー　エーカゲンニ　オキナレ(=止めなさい)ヨ　エライネ　(p.31)

・トマットクレヨ，ナヨ。タマニ　キトクレタンジャネ。　(p.111)

「ネ」は主節が省略された場合，同様のモダリティをもつ主節に対する原因・理由と捉えるか，共通語の「のに」に相当する逆接表現と捉えるかは文脈に依存する。

・コレデモ　ワシガ　イッセキノ　ココロジャネ　(p.20)

原因・理由表現に関する詳細については，山田敏弘(2002)を参照のこと。

17.4　逆接

逆接を表すもっとも典型的な表現は「ケンド」である。

・アホーニ　オーメショ　クヤルケンド，アイカワラズ　ヤセトルンジャデナ　(p.12)

・トシャ　ハヤ　十八ジャケンド　マンダ　イッコニ　オボコインジャデナ　(p.38)

・アンナ，ソレモ　ソヤケンドヨ　(p.11)

他に「ニ」「ノニ」「ガ」「タッテ」「テモ」「ノクセニ」「レド」などが見られる。

- 誕生日過ギタニ　コノ子　マンダ　ヨー　アヨバン　(p.13)
- ソー　悲シー　コトモ　ナイノニ　泣キマワッテカラニ　(p.137)
- アリヨーノ　ハナシジャガ　イマ　チョットモ　ゼニャ　ナインジャデナ　(p.13)
- アンダ　ドコイッツラエ。マンダ　コンガ。　(p.14)
- ソンネ　タント　オネタッテ(=背負ったって)　アヨベリャ　セン　(p.87)
- ソー　アワテタッテ　トッソクニャ　デキンゾエ　(p.105)
- ドコ　イッテモ　ソー　トッタカミタカニャ　モーカランワイサ　(p.106)
- 男ノ　クセニ　ソヤーナ　トロクサイ　コッチャ　ダチンカン　(p.108)
- アルコタ　アルダレド　エー　モナ　アラマイ。　(p.87)

「レド」は推量を表す「ダ」に後接した形のみが見られる。

- マサカ　ソンナ　コトモ　ナカンダレド　(p.110)

郡上方言として特徴的な係り結び「こそ〜あれ」に由来すると考えられる逆接的な接続形式「デコサレ」も見られる。詳しいことは調査中であるが，基本的に意志動詞に後接するもののようである。この点についても詳しく調べる必要があろう。

- ハラガ　ヘルデ　クウデ　コサレ　アジワ　チョットモ　セン　(p.61)

18. 副詞

副詞には，述語の表す様態を修飾する副詞，述語によって変化する量を表す副詞，程度を修飾する副詞，出来事の時間的な位置づけやあり方を表す副詞，モダリティや接続助詞との呼応を表す副詞などがある。紙幅の都合により，語彙的な特徴の強い副詞は省略し，呼応の副詞に限って挙げる。

また，形態的にこれらはイ形容詞(形容詞)やナ形容詞(形容動詞)の連用形などでも表されるが，ここでは無活用の品詞としての副詞に限って示す。

18.1　否定と呼応する副詞

程度副詞のうち，少量を表す副詞には否定と呼応するものもある。

- コリャ　ウレシヤ　アメモ　アホーニ(=あまり)　フランワイ　(p.12)
- アリヨーノ　ハナシジャガ　イマ　チョットモ　ゼニャ　ナインジャデナ　(p.13)
- コトシャ　カキャ　イコ(=一向に)　ナラナンダ　(p.18)
- ワシ　ネッカラ(=少しも)　キズカイナ(=怖い)コト　ナイ　(p.50)
- ドダイ　ヤクニ　タタン。(p.105)

18.2　時間的成分と呼応する副詞

完了的出来事に対して用いられる副詞表現は次のようなものがある。

- ハヤ　アゼヌリ　スマイタカエ。　(p.10)
- アキガ　スンダデ　マー　アンキジャ　(p.14)
- タイエワ　イーッツカニ　スンデマッタ　(p.20)
- ホン　イマンタ　イキナイタ　(p.23)
- 汽車ワ　サッキネ(=とっくに)　イッテマッタ　(p.68)

現時点で未完了の出来事に対して用いられる副詞表現には次のようなものがある。

- 誕生日過ギタニ　コノ子　マンダ　ヨー　アヨバン　(p.13)
- アンダ　ドコイッツラエ。マンダ　コンガ。　(p.14)
- オレモ　ジッキネ　イクワイ　(p.71)

- マー　テンキニ　ナルダモ　(p.133)
- マーハヤ　シゴト　オイテ　メシ　クワマイカヨ　(p.134)

18.3　モダリティとの呼応を表す副詞

否定断定的な捉え方と呼応する副詞には次のようなものがある。

- アレホド　ドーチャクナイ　ヤツァ　トテモ　オレノ　テシコニアワンワイ　(p.99)
- ネッカラ　ハヤ　シラナンダ　モンジャデ　ゴブレー　シマシタ。　(p.114)
- コトシャ　カキガ　ムズ（=てんで）ダチカナンダ。　(p.140)
- コノ　稲ワ　ムタイニ(=一向に)　デキトランナ　(p.140)
- アンダケノ　人物ワ　チョット　ナイ　(p.15)
- カラダガ　イカイナ　バッカデ　ダイニ（=一向に）　ヤクニタタン　(p.88)

推量と呼応する副詞には次のようなものがある。

- イカナリ(=いくら何でも)　ソヤーナコタ　セマイモ　(p.16)
- 今日ワ　バカニ　ウミルガ　キット　夕立ガ　クルゾ　(p.26)
- ユーダチャ　タイガイ　コマケレド　モシ　キタラ　ホシモノ　タノムゾエ。　(p.87)
- アノ　店ナラ　タイテイ　アルラ　(p.152)
- コノ　溜リ差シワ　ドダイ（=どうも）　シンビキシテ(=出口を伝わって)　デガ　ワルイ。(p.78)

外的要因からの判断と呼応する副詞には次のようなものが見られる。

- コノコ　ドーモ　ヒズガ　ナイデ　ドッカ　ワルインジャロカ　(p.123)

働きかけのモダリティ表現と呼応する副詞には次のようなものが見られる。

- マツリニャ　ゼッピ　アスビニ　キトクレ。　(p.82)
- アシタ　ドーデモ(=ぜひ)　キトクレヨ　(p.102)

18.4　「～コト」型副詞

郡上方言でも，形容詞に「～コト」を後接させて副詞として用いる用法が見られる。

- ンマイコト　アイツニ　タネコマレタワイ　(p.92)
- ナガイコト　アーヌイトッタラ　クビガ　ダルーテ　シヤナイ　(p.7)
- コトシャ　栗ガ　イカイコト　ナッタ　(p.15)

「～コト」は連用形の代わりとして用言を修飾するほか，形容詞の否定形を作る場合にも用いられる。

- ワシ　ネッカラ(=少しも)　キズカイナ(=怖い)コト　ナイ　(p.50)

19.　待遇表現

『郡上方言』はいわゆる尊敬語，謙譲語，丁寧語のような高い待遇を表す表現に加え，卑罵表現として低い待遇を表す表現にも言及し，狭い敬語だけでなく広い待遇を見渡した先駆的な目で記述が行われている。

19.1　尊敬語

『郡上方言』に見られる助動詞的な尊敬語としては「ッセル」系と「ナル」系とがある。

「ッセル」系は「五段動詞語幹+aッセル」「一段動詞語幹+サッセル」で表され，過去は「aシタ」「サシタ」を用いる。

- ナニカト　イヤ　スング　ガナラッセル　(p.46)

• アノ　オジーガ　マタ　コゼサッセル　(p.62)

• ワシヲ　ミルナリ　ノッケニ　オコラシタ　ケンド…　(p.116)

• アシニ　キガ　オチカカッテ　オーアイマチ　サシタゲナ。　(p.8)

「ナル」系はラ行五段型で，過去ではイ音便化する一方，非過去では一段動詞化して「ナレル」の形が見られる。

• ホン　イマンタ　イキナイタ　(p.23)

• ドコイキナレル（ナ）　(p.104)

• 本ヲ　読ミナレル，話ヲシナイタ　(p.111)

「ナル」の命令形はやや丁寧な命令表現としても用いられる。

• ドレデモ　カマイナイデ　気ニイッタ方ヲ　モッテ　イキナレヨ　(p.47)

なお，『郡上方言』には次のような一例が見られる。

• オテントサマノ　オカゲデ　コメガ　トレサッセル　(p.36)

尊敬語は主語に対する敬意を表すものであるから，「コメ」に対して敬意を表す尊敬語の使用は本来誤りとされるものである。

特殊な尊敬語形式をもつ動詞には次のようなものがある。

• オキャクサマガ　オイデタ。　(p.30)

• ゴザル　（いらっしゃる　敬・中）　(p.61)

他に「郡上方言の語法」には，「オザル」「ゴザル」「オリャル」「オヤル」の形が「いる」「来る」の意味で用いられるとの記述が見られるが，用例としては挙がっていない。

補助動詞の「てくる」「ている」に相当する表現には次のようなものがある。

• アノ　ババサモ　オゼマゲテ　ヨチヨチ　アルイテ　ゴザッタワイ　(p.34)

• キョーワ　エロー　ヤワッテ　オイデタナ。　(p.146)

• コノ子　カワイラシー　顔シトイデルンナ　(p.48)

• アスコノ　ウチワ　オトコシューガ　ソロットイデルデ　ケナルイ　(p.36)

同じく「郡上方言の語法」では，「イキョーオイデル（行きつついらっしゃる-歩いていらっしゃる)」との記述もある(p.191)。

19.2　謙譲語

特殊な形式をもつ謙譲語としては次のような用例が見られる。

• イッツモカモ　ゴヤッカイナコト　モーシマシテ　(p.21)

• オ佛飯ジャデ　イナダイテ　食エヨ　(p.22)

それぞれ「言う」「もらう」の謙譲語であることは共通語と特に違いはない。

特徴的な用法として記述されているのは対象を高める，狭い意味での謙譲語ではなく，丁重語との分類をされるような動作主を低める表現である。

• マンダ　ヨー　カリテ　イカズニ　オルガ　コンド　ケンカイニ　デルコトニ　ナッタデ　ヨロシク　オタノモーシマス　(p.48)

• ヒーリ(=おひる)　モラッテ　クワマイカ　(p.142)

この場合，「カリル」「モラウ」には実質的な「借りる」「もらう」という意味はなく，単に話し手の動作を低めるために用いられている。ほかに，「カリテネル」で「休ませていただく」の意味で用いられるとの記述がある(p.191)。このほか，「カリテアスブ」で「遊ばしていただく」という意味をもつとの証言も前述の石徹白地区のインフォーマントから得ており，どの程度の生産性をもっていたのか，調査する必要がある。

全国の方言を見渡してみても，尊敬語はあるが謙譲語はないということが多い。形態的に生産性を

持つこのような表現は珍しい。

19.3　丁寧語

丁寧語としては共通語と同じ「デス」「マス」が用いられている。

- ソー　デスデー　（そうなんですよ）　(p.99)
- ドーカ　コーカ　ヤットリマス　(p.102)
- 手紙ワ　アノ人ニ　アツラエテ　ヤリマシタ。　(p.10)

19.4　軽卑表現

動作主を低める表現としては次のような表現が見られる。

- ボーサ(=坊ちゃん)　オリャルカヨ　(p.39)
- ケツカル　（居やがる）　(p.55)
- ナニ　シトルンジャロエ　ハヨー　コバサリャ　エーネ　（＜コバサル＝来る）　(p.64)
- マタ　トラックガ　コバッタゾ。　（＜コバル＝来る）(p.64)
- ズリコイタ（ぬかしやがった）　(p.80)
- ズリウセタ（行ってしまいやがった）　(p.81)
- コキズル，ウセズッタ（ぬかしやがった，行きやがった）　(p.81)
- ソー　悲シー　コトモ　ナイノニ　泣キマワッテカラニ　(p.137)
- ダマッテ　イキマルト　ショーチ　センゾ　(p.137)
- イキズレ　(p.17)
- ウセサレ（来やがれ，行きやがれ）　(p.25)
- ドーニキ　オコイテ　ネテ　ケツカル　(p.103)

20. おわりに

方言はひとつの言語であり，言語である以上，そこに音，語彙，文法(形態・統語)，運用が存在する。『郡上方言』は，今回は取り上げなかったが音に関する分析も詳細に行い，もとより「語彙編」とあるように語彙に関する記述はこの上なく詳しい。文法に関しても「郡上方言の語法」としてまとめられたのは，たかだか数ページの記述ではあるが，その先駆的なまなざしはすでに示したとおりであり，非常に高く評価されるものである。また，語彙の用例がその文法的解釈に実例を与え，実際の運用をも記述する点で，半世紀経った現在でもその価値は他の追随を許さないほどである。

しかし，語彙編として編まれた同書が，文法的な網羅性をもって記述を行っていたかというと，確かに不十分な点は残る。「語法の研究は今後の課題であって(p.189)」と述べているように，もし，この研究が郡上方言に関する総合的な研究に発展していたら，その功績はとてつもなく大きなものになっていたであろう。

本考察では，このような可能性を秘めた『郡上方言　第１集　語彙編』に記述されていたことに限定し分析した。ここで浮き彫りになった課題は，現在，行っている調査・考察によっていずれ明らかになっていく部分もあるであろう。ただ，50年という歳月が持ち去っていってしまった個別の現象のすべてが取り戻せるわけではないことは言うまでもない。

平成の大合併によって，郡上郡の各町村は合併し「郡上市」となる。『郡上方言』が記述してきたのは郡の多様な一面でもあった。大きな市となってもこのような多様性が保持されていくことこそ，『郡上方言』が目指した方向性ではないだろうか。多様な文化・民俗の伝承が図られていくことを願いたい。

【付記】

『郡上方言』が編まれた当時の指導教諭野田直治氏は1991年にお亡くなりになった。そして方言研究会の中心となり本書を作成した岩崎正美氏も新世紀になりすぐ他界された。ともにご冥福をお祈りします。

なお，『郡上方言』は初版50部程度のみの発行であったが，岩崎氏のご遺志により1,000部が再版され，県内のみならず広く研究を助けている。このような郷土の先人たちがいてくれたからこそ，今，ここで研究していられる。このことに対し，あらためて感謝申し上げたい。

【参考文献】

岐阜県立郡上高等学校方言研究会編(1952)『郡上方言　第一集・語彙編』
山田敏弘(2002)「美濃地方の原因・理由表現」『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』51-1
山田敏弘(近刊)『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版